

## 硫黄島レポート

農学研究科生物生産学専攻 渡邊泰教

### I. はじめに

今回、鹿児島大学大学院の授業において、島の文化や生活について学び、その結びとして鹿児島県三島村の硫黄島に行く機会を得た。当レポートでは、僅か1泊2日ではあるが、硫黄島を体験し、感じたことを観光客的視線から考察する。

### II. 硫黄島の概要

硫黄島は鹿児島港から南へ108kmの海上にある周囲14kmの小さな火山島である。主なアクセス方法は定期船「みしま」であり、鹿児島港から約4時間を要する。人口は最盛期の600人を境に減少し、現在110人前後で推移している。主な産業は椿油や大名タケノコを中心とした林業、黒毛和牛の子牛生産を行う畜産業、イセエビ漁を中心とする漁業である。一時は硫黄鉱業で栄えたが閉山すると、人口減少に拍車をかけた。

### III. 島に滞在して感じた事

私達が滞在したのは7月3日～4日であり、残念ながら終始雨で壮大な景観を望むことができなかった。島に到着すると、想像していたよりも島の大部分を山地が占め、起伏が激しく平地が少ないことに驚いた。自給食料確保のための農業が盛んなイメージが強かったが、農地面積は少なく、野菜の自給割合も低い印象を受けた。野生化した孔雀が家庭菜園へ害を与えるらしく、どの家でもネットで畑を覆う対策していた。たまたま雨が目に入ったのだが、酸性雨の影響か目に刺激を感じ、島民の健康や作物、家畜に影響が無いか心配になった。徒歩で島を周遊できるほどの大きさであったが、人口も少ないため、人と遭遇することは稀で、立ち止まると雨、虫、木の葉の揺れる音などの自然音がよく聞こえ、都会では感じられない地球との一体感のようなものを感じた。

### IV. 観光客として見る硫黄島

もし私が鹿児島県に在住しておらず、硫黄島（三島村）をまったく知らない人間だったとしたら、硫黄島に行こうと考えるかという、残念ながら、行かないと思う。まず、島自体を知らないし、本やインターネットでの情報も少なく、行きたいと思えるような“決め手”が無い。事前の情報収集では、わざわざ鹿児島に来て、フェリーに乗り、移動に1日を費やしてまで硫黄島に行きたいと思う魅力を見つけられなかった。そもそも、鹿児島自体がアクセスしにくい場所にあり、空港からのバス移動、そして鹿児島中央駅から、フェリー乗り場までたどり着くには、土地勘の無い人にとっては多大な労力となるだろう。

東京からの観光を考えた場合、1泊2日の旅行は難しく、フェリーの運航状況を踏まえる

と、3泊4日必要となる。この場合、飛行機、フェリー、宿代を見積もって5~6万円必要となり、この価格であれば大手航空路線があり、競争の激しい奄美大島、沖縄のほうがむしろ安く、グアム、サイパン、台湾、香港、韓国も格安で行けるため、海外に行く人のほうが多いのではないだろうか。結果的に言えば、遠方からの旅行者は長期休暇が必要であり、フェリーの運行状況に左右されるために休暇を取る日程が合わせづらいこと、宿泊場所が限られ、費用もかかる硫黄島へ来る事は難しいと予想できる。そのため、現状では鹿児島県民や南九州の住民をターゲットとすることが得策と考えられる。

## V. 硫黄島の魅力

これまで硫黄島について少々厳しく書いたが、次に硫黄島の魅力と可能性について考察する。硫黄島のキーワードとして挙げられることは活火山、硫黄、カルデラ、褐色の海、ジャンベ、孔雀、大名タケノコ、イセエビ、離島、辺境、天然露天風呂（温泉）であると考える。中でも西アフリカ・ギニアの太鼓であるジャンベは特徴的であり、「ジャンベ」とインターネットで検索するだけでも三島村が結果として出てくる程、三島村とジャンベは結びついていると思われる。こうした島のキーワードから地域活性化の柱を作り、宣伝することで、島の特徴を売り出すことができるのではないだろうか。

## VI. 地域活性化対策案

島へのアクセスが悪く、土地面積・平地面積が少ない硫黄島に人を呼び込むにはどのようなしたらよいか、こんな企画があったら硫黄島に行きたいと私が思った事を列挙した。

### ①イセエビ漁の素潜り体験+海底火山ツアー

高級食材として人々を魅了するイセエビを、素潜りにより捕獲し、また、海底から湧き出る活火山の息吹も同時に体験できるツアー。イセエビを買うことは誰もがどこでも可能だが、自らが潜って捕らえる体験ができる所は少ない。特に、都会で育った人にとってイセエビを捕獲することは、生息地が限られること、禁猟区の関係から難しく、縁の無い話である。しかし、近年ではテレビ番組「黄金伝説」や「鉄腕DASH」などでアウトドアが若者を中心に人気を呼んでいる。そこで、硫黄島に来た人を対象に、イセエビ漁の許可を与え、話題性を持たせることで島の知名度を上げ、体験者などの口コミによる評価を「トリップアドバイザー」等の観光地の評価をするWEBサイトに反映してもらうのである。最近ではツイッターやフェイスブックで個人的に情報発信する人も多いため、イセエビ漁が公認された場所として認知されるのではないかと（資源の枯渇という側面も考えられるが）。

私はイセエビを食べたことがなく、未だに憧れの存在である。産地である硫黄島でイセエビを食べられなかったのは残念であるが、観光客限定でイセエビを格安で食べられるようなオプションがあると、旅行者にとって大きな魅力となるのではないのでしょうか。

## ②小学校再入学プログラム+硫黄島講義

小学校の教室で硫黄島の講義を受け、給食体験などで小学校の雰囲気を実験してもらおうという企画である。都会の学校は不審者の侵入防止の観点から、学校内に立ち入ることが殆どできないため、小学生だったころの雰囲気を感じたいと思っても、公に小学校に入れない。現地の小学生も参加することで、外部の人と交流が図れ、情報の共有ができるのではないかと。また、ターゲットとしてカップル、高齢者、家族連れと、幅が広く取れると思われる。管理のしやすい離島の小学校であれば可能ではないかと安易に考えたが、問題点はいろいろとあるため、参加者への注意と島民の協力が不可欠である。

静岡県には店内を学校の教室のようにセットし、給食を提供することを売りにしているレストランがあり、県外からの観光客も足を運ぶ。“懐かしさ”はいつの時代も、大人を魅了するらしく、このレストランには連日多くの人を訪れるという。また、学校給食という描写が日本の数々のアニメに描かれているため、海外のアニメファンもあつたを絶たないということである。

## ③天然露天風呂につかりながらの天体観測体験

硫黄等の温泉は眺望がよく、空が良く見える。残念ながら滞在時に夜空を見ることはできなかったが、都会と離れたところにあるため、夜に見える星空はすばらしいものと予想される。都会で流れ星を見る機会は少なく、見えたときの感動は計り知れない。露天風呂につかりながら満天の星空を眺められるようなことができると面白いのではないだろうか。特に12月のふたご座流星群は、暖かい温泉につかりながら観察できたら最高だと思う。格安往復チケットを販売したりして島へ来やすい環境を整えることも重要である。

## ④サマーキャンプの誘致

冒険ランド硫黄島でキャンプやBBQができることを利用し、夏休み中の子供たちを自然学校のような形で誘致すれば、島の子供達とも交流が図れ、面白いのではないかと。硫黄島での自然体験や、地理的な環境学習の体験や、インターナショナルスクールや在日外国人の子供たちへも呼びかけ、英語学習・国際交流を謳うのも良いかもしれない。夜はキャンプファイヤーを囲みながら子供達でジャンベの演奏会などをすることで、子供達同士が打ち解けやすくなるのではないかと。音楽に言葉は不要であり、国境を越えた交流が可能のため、ジャンベを通してコミュニケーションも図れるのも一つのポイントだと思う。

## ⑤国産線香花火作り体験

主にカップルや親子向けになると思うが、硫黄島で取れた硫黄を使い、国産の線香花火作り体験ができると面白い。インターネットがあれば商品は販売できるため、線香花火工場として産業化できる可能性もあるのではないかと。

## ⑥孔雀加工肉の特産化

孔雀の肉はそのままでは美味しくないので、ソーセージあるいはジャーキー等に加工して販売することで、孔雀の特産物化を図れるとも考えられる。しかし、沖縄県で孔雀肉の特産化に取り組み始めているところもあるため、二番煎じとなる危険性もある。

硫黄島には研究のために訪れる研究者も少なくない、また、その研究者の研究と子供への教育を繋げたいという試みがあるということを知った。小さな島で「最先端の科学授業体験」という構想は、世間に広まれば硫黄島の認知度を格段に上がると思われる。

## VII. 島への観光客誘致の例

東京都所属の神津島では、夏季限定で格安フェリーチケットを販売し、観光客を呼び込んでいる。島には無料のキャンプ場が数箇所あり、格安でテントレンタルもできるため、手ぶらで行くことも可能である。私もこのチケットを利用し、初めて離島に行ったが、そこで初めて人の殆どいない空間を体験し、都会では味わえない時間を過ごすことができた。今でも、あの島にまた行きたいと思えるほど印象に残っている。

一方で、安易な観光客誘致には問題点もありそうだ。格安チケットに惹かれて来る観光客の多くは大学生などの若者グループが多く、ゴミを処理しなかったり、騒ぎ立てたりと他の観光客や島民の迷惑となることが見られた。そのため、人を呼び込むことは、地域社会への悪影響や環境破壊など思わぬ弊害があり、慎重にすべき点でもある。

その他、小さな島ながら観光客の絶えない島がある。その島の1つは広島県にある大久野島であり、ウサギだけが生息する島である。また、愛媛県の青島と宮城県の田代島はネコ島として有名であり、その魅力により海外からの観光客も注目している。長崎県の端島（通称：軍艦島）も多くの日本人が知る小さな島の1つだろう。このように、何か1つのキーワードがあるだけでも、人々は魅了され、検索・観光の対象となりえる。

## VIII. 結び

地域活性化への努力は、住民主体と行政主体があるが、両者が協力して初めて成功できるものであると考える。硫黄島に関して言えば、全国からジャンベスクールに留学生が来ている経緯もあるため、外部から来る人に対して慣れていると思われる。そのため、行政と村民一体となった地域活性化への取り組みが可能である。

また、最近では老若男女問わずアウトドアブームが再発しており、アウトドアメーカー各社は様々なツアーを組んで顧客満足度を高めようとしている。アウトドアメーカーと島が一体となって新しい取り組みもできるのではないのでしょうか。

まだ、観光客としていくには魅力の少ない島だと思いますが、可能性は大いに秘めていると思います。お世話になったジャンベスクールの皆様、引率して下さった行政、先生方に感謝致します。